

《今回の調査結果について》

社団法人日本脳卒中協会 理事長 山口武典先生のコメント

今回のインターネット調査は、脳卒中に対する一般市民の意識を調べるために、脳卒中の罹患率が高まる40歳以上の方を対象に実施しました。その結果、危険因子・症状・発症時の対処法や後遺症など、脳卒中のことをだいたい理解している人も約7割いる一方で、約3割の人は脳卒中に関しては病名程度しか知らないことも明らかになりました。

今回の調査は脳卒中に対する意識の地域差をみるために、全国47都道府県から各100名ずつを均等に抽出して行っており、その結果、脳卒中による死亡率が高い東北・北関東地方^(注1)などは、脳卒中に対する意識も比較的高いことが分かりました。これは、他の地域に比べて脳卒中による死亡率が高く、深刻かつ身近な疾患であると感じていることが要因であると思われます。

脳卒中の危険因子に関しては、「高血圧」(94.2%)、「高コレステロール血症」(77.9%)は比較的多くの方が理解しているようですが、「糖尿病」(40.3%)、「一過性脳虚血発作」(32.4%)、「不整脈」(30.3%)、「心臓病」(24.3%)に関しては、まだまだ理解が不足していることが明らかになりました。危険因子として十分認知されている高コレステロール血症に関しても、LDLコレステロール値が正常範囲より高い人の半数以上は医療機関を受診していないことがわかりました。しかも、受診しない理由として最も多かった「生活習慣を変えることによって改善しようと思った」人のうち、実際に生活習慣の改善に取り組み、継続できた人は半数にも満たないことが明らかになりました。

食生活や運動などの生活習慣の改善は日頃より留意すべき重要なポイントです。しかし、高血圧、高LDLコレステロール、高血糖などの危険因子の改善が自分一人では困難な場合には、医師や保健師など専門家のサポートを受け、それらを放置しないことが大切です。

高血圧、高LDLコレステロール、高血糖は動脈硬化の最大の原因であり、放置しておけばやがて脳梗塞を引き起こす危険性があります。また、高血圧になると、動脈に常に強い圧力がかかるため脳の細い動脈が破れやすくなり、脳出血を引き起こす危険性があります。危険因子の多くは自覚症状がなくひそかに進行していくため、つい見逃してしまいがちです。まず健康診断などの機会にご自分の検査値を確認し、異常値であれば医師の診察を受け、数値を正常範囲内に維持するように努めましょう。

現在、最も注目されている経静脈性血栓溶解療法について知っている方がわずか2割、発症3時間以内に治療を開始しなければならないということに至っては、わずか1割の方しかご存じないという結果にショックを受けました。我が国でt-PAが認可されて以来、迅速な受診の啓発活動を続けてきた我々としては、まだまだ努力が足りないことを自覚しつつ、更なる活動を続けなければならないと改めて決意しました。

脳卒中は高齢者ほど発症率が高い病気です。著しい高齢化社会となった日本では、今後ますます患者数が増加することが予想されていますので^(注2)一人ひとりが日頃の生活習慣を見直し、脳卒中予防を心がけることが大切です。

注1：厚生労働省「人口動態統計」平成17年

注2：厚生労働省研究班（主任研究者：鈴木一夫）平成12年

以上